

事例3

「書くこと」の言語活動を通して評論文を的確に読む

1 育成を目指す言語能力

本単元は、論理的な文章を読んで論理の展開や要旨を的確に読み取るという言語能力を育成するために計画したものである。「現代文」の学習指導要領の指導事項の「ア 論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること。」を指導の中心に取り上げ、「筆者がどのように考えを展開して結論を導き出しているかという、論理の展開の仕方をとらえている。」という評価規準で評価する。

教材である評論「垂直のファッション 水平のファッション」（鷲田清一）を的確に読み取るために、言語活動例の「ア 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。」を参考にして、「書き手の主張を踏まえた上で、論理の展開や構成を工夫して意見文を書く」という言語活動を取り入れる。読む学習の中に表現活動を取り入れることにより、読む能力の伸長を図るとともに、表現力の向上をも期している。

本単元は、第3学年における年間指導計画の5月に位置付けて実施した。10月以降は進学等の試験が控えており、「国語力」が実践の場で試される。また、その後も、目的や場などに応じて適切に表現する能力は、実社会の様々な場面で求められる。

2003年に実施された「OECD生徒の学習到達度調査(PISA)」では、日本の高校生の読解力の低下が大きくクローズアップされた。特に、読解のプロセスにおいては「テキストの解釈」「熟考・評価」に、出題形式においては「自由記述(論述)」に課題があることが明らかになった。また、公開されている2000年の問題を検討した結果、具体的には次のような内容の問題に課題があるのではないかと指摘されている。

- ・テキストの表現の仕方に着目する問題
- ・テキストを評価しながら読むことを必要とする問題
- ・テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる問題

中でも特に、「テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる問題」における日本の高校生の無答率は、OECDの平均の軒並み2倍から3倍と突出していた。

これらのことから、「読む能力」を高めることをねらいとした「現代文」においても、「テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる」ような学習活動を行うことは極めて重要である。

2 学習活動の概要

(1)単元名 「書くこと」の言語活動を通して評論文を的確に読む(5時間)

(2)単元の目標

論理的な文章を読んで、人間、社会などについて自分の考えを深めたり発展させたりする態度を身に付ける。(関心・意欲・態度)

筆者がどのように考えを展開して結論を導き出しているかという、論理の展開の仕方をとらえる。(読む能力)

言葉による認識の可能性を広げ、思考力を深め感受性を豊かにすることにつながるように、語彙を豊かにする。(知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
論理的な文章を読むことを通して、人間、社会などについて自分の考えを深めたり発展させたりしようとしている。	筆者がどのように考えを展開して結論を導き出しているかという、論理の展開の仕方をとらえている。	言葉による認識の可能性を広げ、思考力を深め感受性を豊かにすることにつながるように、語彙を豊かにしている。

(4) 指導と評価の計画（5時間）

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	<p>評論「垂直のファッション 水平のファッション」の論理の展開をとらえるために意見文を書く</p> <p>通読前に「ファッション」についての自分の考えをノートにまとめて発表する。</p> <p>評論「垂直のファッション 水平のファッション」の本文を通読し、難解な部分や興味をもった部分をノートにまとめ、発表する。</p>	<p>他の生徒の考えを知ることで、自分の考えを深めさせる。</p> <p>筆者の視点に気付かせ、本教材への関心を深めさせる。</p>	<p>読む能力 (発表、ノートの記述の確認)</p>
2 4	<p>筆者の主張を読み取るとともに、論理の展開や構成の仕方を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本文からキーワード、キーセンテンスを抜き出し、ワークシート「資料1」に書き込む。 抽象的な語句の言い換えや比喻の意味する内容をとらえる。 各段落に小見出しを付ける。 	<p>本文が序論・本論・結論の三段落構成になっていることを理解させる。</p> <p>「垂直のファッション」「水平のファッション」の具体例を挙げさせる。</p>	<p>知識・理解 (ワークシート「資料1」の記述の確認、発表内容の分析)</p>
5	<p>筆者の主張を踏まえて、ファッションについての意見文を書く。</p>	<p>筆者の主張を踏まえているか、具体例を挙げているかを確認し、不十分な生徒に助言する。</p>	<p>読む能力 (ノートの記述の確認) 「資料2」</p>

「関心・意欲・態度」は、単元全体を通して評価する。

3 評価の例

本単元の目標は、「筆者がどのように考えを展開して結論を導き出しているかという、論理の展開の仕方をとらえている」ことであり、その学習を効果的に進めるために、「書き手の主張を踏まえた上で、論理の展開や構成を工夫して意見文を書く」という言語活動を取り入れた。

「十分満足できる」と判断される生徒の作品例[資料2]に見られるように、書き手の主張に賛同したり、異を唱えたりしながら、目標に見合った意見文を書いている。

4 成果と課題

(1)成果

「垂直のファッション 水平のファッション」は、極めて抽象性が高く、生徒にとって難解な評論であったが、構造図のワークシート[資料1]を利用した学習によって、筆者の主張を読み取るとともに、論理の展開や構成の仕方をおおむね理解することができた。その上で、「筆者の主張を踏まえること」及び「具体例を挙げること」を留意点として、論理の展開や構成を工夫して意見文を書かせた。特に字数の指定等はせずに書かせたが、ほとんどの生徒が、「おおむね満足できる」と判断される内容で、六百～八百字の意見文を書き上げた。

(2)課題

今回は、「垂直のファッション 水平のファッション」を教材として、論理の展開や要旨を的確に読み取るために「書くこと」の言語活動を取り入れたわけであるが、本教材は生徒にとっては難解な教材だった。生徒の学習の状況や発達段階に合わせて、よりふさわしい教材を選定することが大切であろう。

参考文献

- ・ 国立教育政策研究所編集 『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2000年調査国際結果報告書』ぎょうせい
- ・ 『現代文2』東京書籍株式会社
- ・ 『現代文2 指導資料』東京書籍株式会社

評論「垂直のファッション 水平のファッション」

構成図

序	論	<p>第一段落 ファッションの特徴 — 〈鏡〉としてのファッション</p> <p>第一節 要点 ファッションとは 〈鏡〉の現象である。</p> <p>論証・説明 人は、他者の視線を絶えず取り込むことで 自己解釈やセルフ・イメージを調整し合う。</p> <p>第二節 要点 装いとは、セルフ・イメージを補強し、相互に調整するためのものである。</p> <p>装いとは、互いに自己を移し合う〈鏡〉の現象の最も重要な媒体である。</p>
本	論	<p>第二段落 ファッションの二つの方向 — 〈垂直〉の装いと〈水平〉の装い</p> <p>第一節 要点 ファッションとは ① 人を秩序の内部へと組み入れるメディアであると同時に、② 人をその秩序の外部へと連れ出すメディアでもある。</p> <p>ジャン・ルイ・ペドゥアンの例・・・ 仮面・化粧</p> <p>論証・説明</p> <p>② 自分の本質・存在の変換、転覆を行う、宇宙的な意味を持つ外見の変換</p> <p>＝〈垂直〉の装い 例・・・ 子供が大人になる通過儀礼 フィニバルにおける王子から乞食へ</p> <p>① 与えられた存在の枠組みの中で自己イメージの演出や操作を行う、人と人との間のイメージの変換</p> <p>＝〈水平〉の装い 例・・・ 現存する社会における「他人にもっとよく見られたい」という願望を持って装う</p> <p>要点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・装いには〈垂直〉の装いと〈水平〉の装いがある。 ・人類の歴史は、装いの方向を垂直から水平へ変化させてきた。 <p>論証・説明</p> <p>② 〈垂直〉の装い・・・ 宗教や科挙と同様、見えないものをつかみ、「別の世界」へと移行するための技法</p> <p>① 〈水平〉の装い・・・ 同じ社会の他者に向けられた誘惑の手段、対人関係の調整のための手段</p>
結	論	<p>第三段落 二十世紀のファッション・モードの特徴 — 垂直性のベクトルを失ったファッションは差異と形式の新しさのみを求める</p> <p>第一節 問題提示 垂直性のベクトルを失ったファッションはどうなるか。 モードの世紀としての二十世紀のファッションの問題。</p> <p>答え・結論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・匿名 差異を求めるしかなくなる。 ・求められる「新しさ」は、意味の新しさではなく形式の新しさである。 ・ファッションは、身体の輪郭という限定された可能性の幅で動くから、その「新しさ」は循環せざるを得ない。 <p>第二節 まとめ 二十世紀のファッションを支配する モードの特徴</p> <p>① あらゆる権力が變遷するものであり、あらゆる秩序を覆す力としてはたらく (ボードリヤール)</p> <p>② 軽薄で持続性のない無根拠な変換を拡大させていく。</p> <p>③ 自ら作り上げた意味を裏切ることを唯一の目的とする意味体系である。</p>

* 構成図の 部に記入させた。

* 『現代文2 指導資料』（東京書籍株式会社）より、一部改変して使用した。

筆者の主張を踏まえて、ファッションについての意見文を書く

生徒の作品例に、次のように、傍線とその解説を付け加えて示す。

~~~~~  
線部 筆者の主張を、要約、または引用した部分。

——— 線部 筆者の主張を踏まえた上で、自分の考えを深めたり発展させたりして述べた部分。

——— 線部 接続詞などを効果的に用いて、論理の展開や構成を工夫した部分。

「十分満足できる」と判断される生徒の「意見文」作品例

「ファッションとは鏡の現象である」と筆者は述べている。私は今までそのようなことは一度も考えたことはなかったが、知らず知らずに私たちは他人を鏡として自分自身を織り上げていることに気づくことができた。

しかし、読み進めるうちに一つの疑問を持った。私たちは(わたし)を縫い上げるために、常に他者の視線を取り込み、同じ意味の衣服を身にまとわなければならないのか、ということだ。確かに私たち人間は、絶えず視線を交換している。そして(わたし)というイメージを互いに調整し合うことも多々あるだろう。だが、私にまなざしを送ってくれる他者は数えきれないほどいる。その一つ一つのまなざしを理解して、すべてを自分の中に取り込み、補強していかなければならないのか。私にまなざしを送ってくれる人が百人いるとしよう。その中で、何種類のまなざしがあるかは分からないが、一種類でないことは明らかである。二種類、三種類かもしれないし、十種類以上あるかもしれない。多数のまなざしがある中、私たちはすべてのまなざしを取り込んでいるのだろうか。そんなに多くのまなざしを取り込んで補強し続けたら、(わたし)を見失ってしまうのではないだろうか。筆者の言うように、私たちは自分の感覚だけでは、織り上げられない存在で、他者のまなざしが必要であることは間違いない。しかし、他者のまなざしばかりに頼って、自分を見失っては何の意味もないと思うのだ。

要するに、私たちは、自分というものを見失わないために、他者のまなざしの中でも、あるまなざしを取り込むべきか、そうではないかを、自然と使い分け、多少遠回りしながらでも、私の中の(わたし)を織り上げていると言った方が適切ではないかということだ。